

184

こんにちは。塾長の大井です。

読者諸氏の皆様にとって国語はどんな科目だったでしょうか。

本が好きで、文章が好きで、勉強している気がせずに自然に楽しめたという方もいるでしょう。

一方、なんだかよく分からなくて、いまいち納得もできなくて、ただ先生がそうだと言うからそうなのかとあまり面白みを感じなかった人もいるかもしれません。

私の周りの大人たちは（特に理系の人たちは）、後者の割合が多い気がします。

かく言う私の相方こと田宮もその1人だったようです。

子どもたちの中でも、後者の割合は年々増えているように感じます。

何しろ国語は、いちばん危険な「自分なら」と言う読み方でも一見読めてしまう科目です。

算数では、逆算や検算をすれば自らの誤答に気づけますが、国語は

客観視が大変難しく、気づきにくい科目です。

ですから、多くの人たちが国語はセンスの科目だと思いがちです。

ですが、国語は決してセンスや感覚の科目ではありません。

算数に真理があり、理科に原理があるように、国語にも明確にして意図的な論理があります。

子どもたちはまだまだその論理の迷宮に迷い込んでしまう生き物なのです。

それではなぜ、そんな国語力の低下が生まれているのでしょうか。

問題は、子どもたちの読解力の低下というよりは、むしろ指導者の橋渡しの力の低下にある気がします。

答えはこうなんだ、こういうものだ。そう押しつけてしまっただけは指導者失格です。

私は体を動かすのも好きでしたが、本当に本をよく読む子どもで、国語は苦もなく解くことができました。

しかし教師になってからは、そうではない子どもたちをこそ対象として、どうすれば正しく読み、正しく書けるようになるかという視座に立ち続けました。

私の授業ではまず子どもたちが誤答に陥った過程を見せ、それが理に拠っていないことを分かせます。

いわば主観の生まれどころ=本文からの逸脱箇所を自覚させるわけです。

そして次に、本文の論理をいつも腑に落ちるまで見せ続けます。技術名・視覚化・色づかい——全てオリジナルの教え方で(企業秘密なのでここでは明らかにしませんが)、正しく読み正しく書く技術を懇切丁寧に(この親切心が教える側には不可欠です)教えていきます。

結果、例えば4つに分かれていた解答は、私のほんの少しの示唆(誘導ではありません)で、ひとつの答えへと収束します。

この論理の美しさは、算数にも伍する国語のおもしろさの一つです。

そんな授業を見ながら、田宮が

「俺も大井先生の授業を受けてたら、絶対国語が得意になってたよ。」

とよく言います。

私の授業は非常に論理的で腑に落ちると、他の理系の先生にも度々言われました。

ですが、学問である以上、そこに「理」があることは当然です。そ

して、決定的な国語力上達の可否は、論理ではない「もう一つの理」
が握っているのです。

(次回につづく)

2018年5月7日

大井雄之